

慶応義塾大学 森基金 2016 年度

研究成果報告書

研究テーマ

「ドイツ・サマーアカデミー視察報告書」

～就業困難な若者が就職できる効果的な訓練プログラム開発へ

の基礎研究の一環として～

慶応義塾大学 大学院 政策・メディア研究科

後期博士課程

奥田美都子

(学籍番号 81449096)

ドイツサマーアカデミーの視察報告書

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科
後期博士課程 奥田美都子

2016年8月7日～15日まで9日間、ドイツのミュンヘン商工会議所と職業紹介所、リューネンブルク大学との共同企画であるサマーアカデミーの取り組みと実施風景を視察した。

この取り組みは、基礎学力のない落ちこぼれの若者が、義務教育の卒業試験に合格して、職業学校に進学し、職業人として社会で自立して働くことができるよう8年生（日本の中学2年生）の夏休みを利用して、早めに教育指導をするものである。2009年から開催され、今年2016年で8年目。参加者の約97%が義務教育の卒業試験に合格し実績を上げている。その結果、1か所でスタートしたサマーアカデミーは、現在ドイツ南部を中心に6か所にまで広がっている。今回は、その6か所のサマーアカデミーのうち、ミュンヘン北東部のWaldmunchen（以下ヴァルドミュンヘン）で実施されたサマーアカデミー（2016年7月30日～8月21日の23日間）の様子の一部を視察したので報告する。

1. サマーアカデミーの内容

参加希望者を募集して、面接試験に合格すると無料で参加できる。定員50名、一人当たり3,500ユーロの費用は、ミュンヘン市が支出。夏休みの3週間半いろんな分野（ドイツ語、数学、心理学、スポーツ、音楽家、カウンセラー、ソーシャルワーカー等）の専門家が指導する。大学生がアシスタントとして参加し単位を取得できる。リューネンブルク大学のKurt Czerwenka教授が開発したプログラムで、筆者は2016年8月にミュンヘン北東部のサマーアカデミー開催地の一つであるヴァルドミュンヘンを訪問し、Czerwenka教授が校内を案内して参加学生の様子を説明してくれた。（今年実施した場所は、デュッセルドルフ、エッセン、テーゲンスブルク、ヴァルドミュンヘン、インゴルシュタット、ホンブルクの6か所。2009年から2016年（今年）までに49か所で実施し、卒業生は約1800人）。

そのプログラム内容のコンセプトは、3つの柱があり、①基礎知識（読み、書き、そろばん）の習得、②自己肯定観・自己効力感の向上、③自己表現力の向上と改善である。そのために、規則正しい生活をさせ、貧しい家庭や親が離婚して片親など家庭的に問題のある子供たちが、悪い環境から離れてじっくり勉強に取り組める環境を提供。今まで経験できなかった人間性を養う活動（演劇、音楽鑑賞、歌う、絵をかく、水泳、ハイキング等）をさせる。5～6人のグループを作り、ディスカッションさせる。最後に、キャンプの成果として演劇の発表会を行う。ある意味で徴兵制をカバーするプログラムであり、人間性向上教育、自立教育といえる。「生産学校」は、1年間だが、午前中のみであり、家に帰れば日常問題があるが、サマーキャンプは家の問題から離れて集中して指導を受けられるメリットあり。

具体的には、①家庭では、バカ扱いされたり、虐待を受けたり、自尊心を傷つけられた子供たちに、「失敗は恐れるな。むしろ、失敗することはいいこと」と言うことからスタートし、ほめて認める。成功体験をさせることにより自信をもたせる。②どんなことでも相談できる専門家を配置し、2人の

2016年10月15日

生徒に1人の先生が面倒を見る。先生の資質が重要で、マイスターを持ち、教えることもできる人間性豊かな人を選んでいる。③終了後も、1年間は担当の先生が1週間に1回グループごとに会ってその後の問題に対応し、やる気を維持させる。

月曜日から金曜日のスケジュールは、以下表1の通りである。水曜日のみ午前中に職業体験の授業があり、6から7つの職種を30分ごとに順番に体験する（詳細は、「2. 職業体験の授業」参照）。

(表1 ある日の日程)

*数学

	月曜日			
	A	B	C	D
07:00	起床			
07:40-08:00	チーム会議			
08:00-08:30	朝食			
09:00-09:45	読書	チェックX	面接態度	PC コース
09:50-10:35	*チェックX	読書	PC コース	面接態度
10:50-11:35	面接態度	PC コース	読書	チェックX
11:40-12:25	PC コース	面接態度	チェックX	読書
12:30-13:00	昼食			
13:15-15:00	スポーツ	スポーツ	コーチング	職業学
15:30-16:00	読書時間 (チューター制グループ)			
16:15-18:00	企画 (ミュージカル、工場、勉学)			
18:00-18:30	チーム会議			
18:30-19:15	夕食			
19:15-19:45	生徒議会/チューター会合			
20:00-21:30	夕刻プログラム			

土日は、郊外へ遠足に行き、オリエンテーリングや山登り、湖で泳いだりすること。指導者は、平日は、秩序正しい生活（起床、食事、就寝時間の徹底）の指導、学科の授業や最終日のミュージカル発表に向けての練習指導などに追われ、土日は、郊外への遠足の引率があり、体力的にも精神的にもかなりハードである。そのため、指導者の選考にも気を使っており、単に専門分野に精通しているだけでなく、生徒に愛情深く教えられる人を厳選しているようだ。専門家は、ドイツ語、数学、読解、PC等の学科の専門家だけでなく、ソーシャルワーカー、サイコロジスト、学習セラピスト、ダンサー、俳優、歌手、プロのスポーツ選手等幅広く採用している。これは、いろんな経験を通じて人間性を高めることや一流の文化や芸術に触れることで新たな自分の適性や自己発見につなげることで、また、最終日でのミュージカル発表で自分の得意な分野で自己表現することにより、協調性や責任感をはぐくみ、達成感や自信を獲得することを目的としている。

一人の専門家に2人のアシスタントをつけて授業を運営する。アシスタントとして大学生を採用するが、専門家の指導員と同様、生徒に愛情深く接することのできる人を選ぶ。大学生にとっては、夏

休みに単位を取得できるので、アルバイトの報酬は高くないが、単位を取得できて、さらに指導法や技術を学べるのでメリットがある。

毎年、サマーアカデミー実施前に選考が行われるが、採用者は直前に1か所に集まり、事前教育を受けることが義務付けられている。この事前教育が重要だと思われる。

さらに、数学（チェックX）と読解を大切にす方策は、リューネブルグ ロイファナ大学の教育科学研究所を通して評価を受け、このサマーアカデミーでのほぼ確立した授業内容となった。職業生活に入って毎日重要とされる内容に焦点を絞っている。

2. サマーアカデミーのこれまでの結果

2007年サマーアカデミープロジェクトの初めから、科学的な議題の認知的な要素に並んで、自己効力感（一般的、学校で、個人的に）を分析してきた結果について示す。

サマーアカデミーに参加したことで全ての領域で高まり向上している事がわかり、心理学者アンネ・チンマーマンのロイファナ サマーアカデミーの研究で検証された（論文、教育科学の教授陣、心理学とアプリケーションサイエンス、ハンブルグ大学）。チンマーマンは全てのサマーアカデミーに参加した生徒達が、自己効力感が高まったと強調している。生徒達の学校生活と授業や社会での自己効力感、最初は脅威を感じるが、この3週間のサマーキャンプと次の1年間のアフターケアの期間に大変向上している。

楽観スケールの価はプロジェクトのあとはその前よりも大変高くなっている。

キャンプの後、その1年後に自己効力感と自己コントロールを測ると、大変良い関係があることがわかった。強い自己効力感、以前無力感を感じていなかった生徒より無力感を感じていた生徒達の方が、より強くなっていたのが確かめられた。日常生活の中で社会の援助をあまり経験しなく、ほめられることもなく、良い学習経験を得る機会もなかった若者達は、サマーアカデミーに参加する事で特に自己効力感を得られる事は大きかったと思われる。自己効力感の結果は、異なるプロジェクトの専門的な観察でも確認され、卒業生の研修コースでも大変安定性が見られた。

若者達のモチベーションを覚醒させ、独自の道を開きそこを自ら歩めるように、将来の為の彼らの道の“ガードレール”を作ることが、サマーセミナーの若者の為のチャンスであり、考え方の礎石だとする。最終的に若者達の可能性は、経済的な面のみならず社会の一員としての場所を持ち、社会生活に参加するということである。彼らは社会のアクティブメンバーとして生活し、やがて家族の父親として、母親として、生活と人生は前にすすむ。

このプログラム作成に当たり、参考にした教育の理論についてクアート・チェルベンカ教授に尋ねたところ、ペスタロッチ、バンデューラ、フンボルトという名前が挙がった。

特に、アルバート・バンデューラ (Albert Bandura 1925年-)は、カナダ人心理学者で、「社会的学習理論 (モデリングによる学習)」や「自己効力感」で広く知られている。まさに、このプログラムを受けた生徒たちが、サマーアカデミー終了後に自己効力感が高まったという結果が出ていることはうなずける。

従来の学習理論が、学習する個体自身の経験や他者からの強化（刺激）を前提としていたのに対し、バンデューラは、他の個体の行動を観察し、意識的に模倣（モデリング）することによっても成り立

つことを実験により実証し、新たな理論を提唱した。

モデリングとは、他の個体の行動と結果を観察し模倣することによって、行動パターンを学習（修正）することを指し、以下4つの過程が存在する。

(<http://carraria.seesaa.net/article/409647516.html> より一部抜粋)

モデリングの過程	概要
1. 注意過程	モデルとなる対象とその特徴を選択し、そのモデルを見る過程。モデルの対象は幅広く、身近な信頼・尊敬・好意を寄せるものやリーダーシップを発揮するものに限らず、著名人・有名人も該当。モデルからの刺激と観察者自身の特性の双方が影響する。
2. 保持過程	観察したモデルを記憶として保持する過程。モデルの特徴・行動パターンを抽象化し、イメージ化・言語化することを通じて保持する。心の内部で繰り返しモデルの行動を模倣（リハーサル）することも有効とされている。
3. 運動再生過程	保持した記憶を実際に行動で再生する過程。頭の中で描いている「モデルの行動イメージ」と「自分の実際の行動」との間にあるGAPに気づくことができる。そのGAPからフィードバックし、行動を少しずつ修正することで、モデリングの正確性や洗練度を高めていく自己修正の過程といえる。
4. 動機づけ過程	学習した行動を遂行するための動機づけをする過程。動機づけには、環境から与えられる「外的強化」、モデルから受ける「代理強化」、自分自身で行う「自己強化」がある。「外発的動機（インセンティブ）」「内発的動機（モチベーション）」という分類もできる。

このモデリングを通じて得ることができる効果として以下の3つが挙げられている。

- 新しい適切な行動の習得
- 不適切な行動の制止・抑制
- 反応促進（他者に誘発され行動すること）

自己効力感とは、ある状況において適切な行動とることができるという予測や確信で、「自分ならできる」という自己への信頼感・有能感のことをいう。バンデューラはこの自己効力感を「自分が物事をコントロールしているという効力に関する信念」とし、以下4つの影響要因により、それが形成されるとした。

これら4つの要因から、大小の影響を受けることは間違いないが、重要なことは「これらの要因を自分自身がどう捉えるか」とバンデューラは述べている。今している体験をどう捉えるか、モデルと

なる人の成功をどう活用するか、第3者の意見をどのように受け入れるか、生理的・感情的な状態をどう乗り越えるか。自己効力感を高めるために影響要因をどう活用できるかは、自分の捉え方次第で変わるということである。

影響要因	概要
成功体験	自分の力で達成した・成功したと感じられる体験。自己効力感を高める最も効果的な方法。 体験の質が重要だとし、忍耐強い努力により障害に打ち勝つ体験つまり困難に打ち勝って成功した体験が効果的だとされる。
代理経験モデリング	ロールモデル・成功モデルのように、自分と類似する人の成功から自分にもそのようなことができるという信念を獲得する。モデルと自分の類似性が高いほど、効果的だとされる。
社会的説得	社会、第3者からの説得。能力があることや、達成の可能性が高いことを言われる。この要因から形成される自己効力感は一般的に弱いとされる。
生理的・感情的状態	頭痛などの生理的要因や、嬉しい・楽しいなどの環境的要因。一時的な影響であることが多く、影響は小さいとされる。

3. 各授業の内容

(1) 職業体験の授業

職業体験の授業は、毎週水曜日の午前中に、以下の6つの職種で実施されていた。

- 1) 手工業（木工、メタル、自転車）
- 2) レストラン
- 3) 老人介護
- 4) 菓子
- 5) 事務
- 6) 庭、園芸

上記6職種を選んだ理由は、人手不足が深刻な職種なため、それらの技術を習得して社会に出て、人手不足を解消できる人材に育てるためだそうである。中でも特に深刻な人手不足業種は、レストラン、介護、庭仕事とのことだった。女子生徒には、美容（コスメ、エステ）も人気のある業種だそうだが、指導者がいないため今回は対象から外れたそうである。また、男子生徒は、メカニックなどの技術を好んで選ぶ傾向があるため、その職業に就ける可能性のある職種をまずは選んだとのことだった。（最近では、難民や移民が増えており、90%が移民である職業学校もあるそうである。）

上記6業種を30分ごとに順番に体験して、全員が自分に合った仕事を見つけることを目的としている。30分が集中の持続できる時間として順番に体験させ、ほぼ全員が自分に合う仕事を見つけることができるとのことだった。ヴァルドミュンヘンでは、今年は90人の応募があり、54人合格と

なった。8年生から9年生（14から15歳）で学校の成績が良くない子（成績の良い子は来ることがない）、必要としている子、恥ずかしがり屋、社会的にハンディキャップのある子（例えば、ひとり親、アルコール中毒、教えれば伸びる潜在能力のある子など）を指導者となる先生たちと選ぶそうだ。警察で事件を起こした子は採用しない。このように、ほとんどの生徒が、成績が悪く落ちこぼれてしまったため、このサマーアカデミーで勉強して、9月から学校の成績を上げて卒業試験に合格して職業学校に進学できることを目的としている。中には、移民の子で成績はいいのだが、語学のハンディ（ドイツ語ができない）があるため、合格となった男子生徒もいた。彼は、アフガニスタン出身で、将来は医者になりたいらしい。ドイツが以外は断トツに優秀であり、ドイツ語を習得できればギムナジウムに進学し、将来は大学で医学を専攻できる可能性があり、期待しているようだったが、まれなケースのようだ。

開催地域ごとに生徒の特徴が異なるが、このヴァルドミュンは、ドイツ人が20%、残りの80%は外国人（ガーナ、ナイジェリアなどのアフリカ出身の子）が多かった。

例えば、ハンブルクでは日本と同じように不登校・引きこもりの問題があるとのことだ。エルベ川沿いは裕福な家庭が多く、貧困家庭との格差が広がっているため秩序が低下しており、それが原因となって、裕福な家庭の子が不登校や引きこもりとなっているそうだ。デンマークでは家庭で教育して学校に行かなくても卒業できるが、PISA（OECD 生徒の学習到達度調査）の試験結果は良好である。ドイツでは、全ての子が学校に行かなくてはならない。

（2）チェックX（数学）

参加者全員にアンケート調査を実施した結果、一番人気のある授業がこの「チェックX（数学）」だった。担当教員は、ゲオルグ・トロウムポウキス先生で、ヴァルドミュンヘンのサマーアカデミーの教員のリーダーであり、心理学者でもある。サマーアカデミーでの数学は中等学校の9年生の為に準備する事を目標とし、数学を日常で使い、職業生活に入って毎日重要とされるであろうものを学ぶ。

学習企画の構成と方法は、個々の計算力障害の治療に関する治療学習の原則を推進している。全部で12コース単位で詳細の教材マニュアルが作られている。これは、ミュンヘン商工会議所が職業学校に進学する際に実施している数学の試験に準拠したカリキュラムになっているらしい。

最初に、間違いをする日を作る。これは数学的なテーマをいかに考えて取り扱うか、既に今まで習って知っている事柄の復習を偏見なしで行う。参加者の生徒達は、リーダーや大学生の教師とお互い知り合う機会もある。そして小、中等学校の5, 6, 7, 8年生の4年間の数学の包括的な知識を知る為に、入門テストを行う。

企画の主なる構成部分として12学習授業単位を導入して書類で案内しているが、参加生徒達が何をやるのかがわかり易く記されている。そこで、どういうテーマで学び、どのようなプログラムの日程が組まれているかの方向指導がおこなわれる。

これは参加者に安心感とやる気を起こさせる。特に、強調されていることは、チームワークで一緒に学習して、チームは協力して団結することが大切である事を伝えることである。個人の成績は評価しない。目標は、全てのグループが前進することで、誰もおちこぼれる者を作らないということである。ここでどの生徒達も一度立ち止まり、それがどういうことであるかを考えさせ明らかにする。ここにいる皆のための時間であり、その為に君達を必要とする、ということだ。

12時間の学習授業は、過去4年間の数学を復習する機会を得て、理解出来ていないところは個人的に助けをえられる。数学コースはテーマ毎に進めていくが、一番数学が弱い生徒が見つかった場合は、大学生が横について、質問をわかり易くもう一度考え方を説明しながら理解させるように指導している。

隣の席の仲間と一緒に考えることが望ましい。生徒達は仲間を喜んで助けることがわかる。生徒達の話していることを聴くと、理解している生徒はよりよく説明して助けているが、それは何が分からないか、どこで相手はつまづいているのかが良くわかっているからだと言える。

このあたりは、教師や大学生がしっかり観察して、正しく説明しているか見極めなければならない。間違っていて説明していることを見逃してしまうことは避けなければならないからだ。

メインの学習が終ると期末テストを実施する。これは同じ課題で構成された内容になるが、異なる数字を用いる。生徒達は、最初の説明でここでは個人の成績評価をする事が目的ではないという事を理解しているが、個々の理解度が改善され進化し良くなるのが大切である。正確な結果は、“最初のヴァルドミュンヘンの商工会議所サマーキャンプの結果”で報告している。

(3) 読解

ドイツ語を読み理解すると言う学習構成は、基本的にはリュネーブルグ大学のシュテフェン・ガイルベルグ(2011)の指導に基づいている。一般的な学習の目的は、より正確に読むこと、また読む意欲を向上させることだ。この目標を定めて、ドイツ語の授業は45分間を14回、読書は30分間を12回行った。

学習時間の初めに、我々は生徒達参加者に今までのドイツ語の授業での経験を話して、ドイツ語の先生たちを評価するか、しないかを聞いた。

今までのドイツ語の授業は、明らかに理解して体得したのは希で、全員出来が悪く先生から怒鳴られたということだった。そこで、我々は最初から参加者に、今までとは異なる勉強方法で試みることに勤め、怒鳴ったりそのような類のことはしない事をしっかりと説明した。

1) 第1週

最初の週の読書学習の目標は、参加者たちの学習の中で、読書術を覚える範囲で知識水準を獲得し、キーワードを系統的に引用するテーマで学ぶことである。

ここでは、最初に共通の基盤を確立させ、その次に集中的に単語の部位の定義と単語の部位の意識に関して学ぶ。

それに加えて生徒達は部分的な整合性を作りだし、異なる概念の中から共通の表題を見つけ出す。並列してある単語の中から、そこに適合しない言葉を選択する。この両方の作業練習は、後に文章の小見出しを見つける為の目的があり、そして2つの読書戦略を持ち、これにより難しい文章を確実に理解できるようになるのである。

以下の様に、参加者達と一緒に異なるカードとヘルプ用の標識を作成して、学習中に視覚的にわかり易く補助できるようにした。言葉の質問を導入して、ヒントを与えてキーワードの定義を考え出し、次は短い文章を使い学びました。

2) 第2週

ドイツ語テキストを動機付けをしながら励まして学習させている時、何回も反問してもらうことで

全体で意見交換ができる。それが大切なことで、それによって生徒達の考えがわかり、それは他の分野の音楽（ヒップホップ、ラップ、ロック）、スポーツ（サッカー、スケートボード）、そして日常生活（ボディケアや化粧、動物やペット）に関しても同じことがいえる。この学習では3人から5人の小さなグループに分けて実施すると、個性がよりわかり成果が大きく出てくる。

この小さなグループに分ける方法は、第一週めのザルツブルグ読書スクリーニングと、間違いを作る日の質問状の回答などを通しての会話や1週間の観察を考慮して行う。

メンバーの組み合わせは定期的に考えて変更する。この小さなグループで次はステフェン・ガイベル先生の提案されたドイツ語テキストを用い学ぶが、常に青少年達の興味があるテーマや分野を使い、難しすぎない丁度合う適当なレベルになるようにと注意する。参加者の課題は、まずドイツ語テキストを全部読み、その中で理解できない単語に線を引き、それからキーワードをハイライターで目印を付ける。この作業で、多くの場合は目的に叶い確実に理解できるが、ハイライターを使いすぎないようにすることも大切で、良い目印しとさせ理解する上で助けになり、自分の言葉で理解できるようになる。

3) 第3週

この週の重点は、既に獲得したテキストスキルで、参加者達青少年に関連したテーマを応用して使い、意見を対立させて論議をさせることだ。

この時のテーマは、例えば人種差別、エイズ、新聞記事や携帯電話の落とし穴などが考えられる。生徒達が彼らのレベルに合わせたドイツ語テキストを読み終えて、意味不明の言葉を辞書で調べてから、またキーワードをハイライターで目印をつけさせて、その後で、それぞれの異なった内容のテキストを全員の授業学習で一緒に論議して話し合う。

このやり方で、ドイツ語の文章の読解力を各方面から鍛え、文章を読んで理解するということがいかに大切で重要なテーマであるかを体験させ、人生の困難な時期に出会う時、助けとなる必要な情報を読んで獲得できるようにするためである。

若者達が自分達個々の人生経験とテキストの情報が結びつく事に気がつき、実に熱心に論議を始めたので、特に現実の日常生活に文書を読む時の読解力がいかに大きな意味を持つかに気がついたという印象をもった。

この出来事は、皆が小さな図書コーナーに興味を示し、読むと言う行為を開始する機会になった。文章を読む技術の改良と共に、2つ目の主なる目的は読みたいという動機を向上させることである。若者達の持っている興味や、若者を取り巻く環境やあるいは抱えている問題などで、彼らが情報を必要としている分野などを考慮して、興味をそそる幅広いカテゴリーの本を並べた。

かなり多くの若者達が本を利用し読み始め、特に“パラノイア パーク”の本などは読んでしまった者もいたし、3週間目に読み始めた人もいた。

以上